

Title	フィリップ・ソレルスへのインタビュー：パリ・ガリマール本社、2017年8月28日
Sub Title	Entretien avec Philippe Sollers : Paris, Aux Éditions Gallimard, le 28 août 2017
Author	阿部, 静子(Abe, Shizuko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2018
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.66 (2018. 3) ,p.107- 127
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20180331-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フィリップ・ソレルスへのインタビュー ——パリ・ガリマル本社、2017年8月28日——

阿 部 静 子

ここに訳出したフィリップ・ソレルスへのインタビューは、ソレルスの『エクリチュールと極限の実験 (*L'écriture et l'expérience des limites*)』¹⁾ 翻訳を機に訳者2人(阿部静子・築山和也)がガリマル本社にあるソレルスのオフィスを訪ねて行ったものである。インタビューの内容は、『エクリチュールと極限の実験』所収のロートレアモン論とバタイユ論に関連して、ロートレアモンとシュルレアリスム、バタイユについて、さらにソレルスの近著およびソレルスの変わらぬ関心の対象である中国について、というものである。インタビュー全体は紙数の都合で一部割愛してある。

1. シュルレアリスムとロートレアモン

——あなたはシュルレアリスムのロートレアモン解釈とは明確に対立する立場を示していますが、その一方でブルトンやアラゴンとは親しい関係にありました。あなたが敬愛するブルトンは1966年に亡くなっています。マルスラン・プレネ『彼自身によるロートレアモン』²⁾ やのちに『エクリチュールと極限の実験』に収録

1) *L'écriture et l'expérience des limites*, Éditions du Seuil, 1968. 所収記事は冒頭の戦闘的「プログラム」のほか、ダンテ、サド、マラルメ、アルトー、バタイユ、ロートレアモンについての各論考。ロートレアモン論以外は『テル・ケル』誌(註4を参照されたい)に掲載されたもので、いずれも同年刊行の *Logiques* (Éditions du Seuil, coll. « Tel Quel », 1968) にも収められている。

2) Marcelin Pleynet, *Lautréamont par lui-même*, Éditions du Seuil, coll. « Écrivains de toujours », 1967. (マルスラン・プレネ『彼自身によるロートレアモン』豊崎光一訳、白水社(白水叢書)、1979年。) マルスラン・プレネは、

される「ロートレアモン^{シアンス}の学問」³⁾が発表されたのは、まさにその翌年のことでした。あなたにとってシュルレアリスムとは当時の文学・思想的状況においてどのようなものだったのでしょうか？

ソレルス：私にとってのシュルレアリスムとは、アンドレ・ブルトンのことです。1960年代の初め頃、私はブルトンと知り合いになりたくて『テル・ケル』誌⁴⁾のために対談を依頼する手紙を何度も書きました。彼の返事は、大いに私を驚かせました。というのも彼は、モーリャックとアラゴンによる恐るべき推薦があるにもかかわらず、私の処女作『奇妙な孤独』⁵⁾を大いに評価したと返事に書いてきたからです。これは驚くべきことです。同じ手紙には、彼が私の本を当時入院していたバンジャマン・ペレのところに持っていったともありました。その後私は彼と会うことを申し入れ、フォンテーヌ街42番地の想像を絶する彼の自宅に会いに行きました。家に入ると、左手の壁にキリコの絵が掛けていました。こうして対話がはじまったのですが、ブルトンは非常に慇懃で、その話し方は彼のエクリチュールに似て素晴らしく、きわめて明快かつ非常に精細で中味の濃いものでした。われわれは大い

創刊間もない『テル・ケル』誌のメンバーとなって後、現在に至るまで一貫してソレルスの片腕としてその活動を支える一方、作家・美術評論家として幅広く活躍している。

- 3) Pilippe Sollers, « La science de Lautréamont », *Critique*, octobre 1967, n° 245, Les Éditions de Minuit. その後 *Logiques*, *op. cit.* に収録。
- 4) 『テル・ケル (*Tel Quel*)』は1960年、フィリップ・ソレルス以外は当時ほぼ無名の6人の若い作家がスイユ社から刊行した季刊文芸誌。スイユ社にいたジャン・ケロールが支援し、フランシス・ポンジュが精神的支柱となった。『テル・ケル』は雑誌刊行の他にも討論会を開催するなど、5月革命期を中心にアヴァンギャルドとして当時の文芸思潮を牽引した。『テル・ケル』誌は1982年の94号を最後に終刊し、後継誌『ランフィニ (*L'Infini*)』に引き継がれ現在に至っている。なお、『テル・ケル』誌上でのブルトンとの対談は実現しなかった。
- 5) Philippe Sollers, *Une curieuse solitude*, Éditions du Seuil, 1958. (フィリップ・ソレルス『奇妙な孤独』清水徹訳、新潮社『現代フランス文学13人集・1』所収、1965年。)

に語り合いました。その後しばらくして、私はブルトンから1962年ジャン＝ジャック・ボヴェール社刊行の『シュルレアリスム宣言』の再版を受けとったのですが、この本は私にとって鍾愛の書、魔法の書となりました。そこにはブルーのインクに細い字体で書かれたアンドレ・ブルトンの献辞が添えてありました。「妖精たちに愛された人、フィリップ・ソレルスへ。アンドレ・ブルトンより」。私はブルトンはこの分野の第一人者であり、思い違いをするはずはないと考えました。皮肉な意味で注目してくれていたとすれば別ですが、そうは思いません。彼は私を妖精の庇護のもとにおくことによって、非常に本質的なことに触れたのです。彼はたしかに正しかった、なぜなら事実、当時私は尊敬すべき妖精の保護下にあったからです。この妖精については、11月刊行予定の本をお読み下さい。この本はドミニク・ロラン宛て書簡集の第1巻です⁶⁾。正確に言えば、1958年から1980年までの私の手紙で、そこではジョルジュ・バタイユ、アンドレ・ブルトン等が話題となっています。もう1巻は1981年から2008年もしくは2009年までを扱うことになっています。ドミニク・ロラン本人の手紙は別に刊行されることになっていて、いずれも刊行準備中です。そこでもブルトン、バタイユそしてロートレアモンが話題とされています。

シュルレアリスムにとっての問題とは、アンドレ・ブルトンとルイ・アラゴンによるロートレアモンの発見のことです。彼らは『ポエジー』を書き写しに国立図書館に行った時に、『ポエジー』は恐らく『マルドロールの歌』と関連づけて出版するべきではないと感じたのです。つまり彼らにとっては

6) Philippe Sollers, *Lettres à Dominique Rolin (1958–1980)*, Éditions Gallimard, 2017. ドミニク・ロラン (1913年–2012年) はフェミナ賞を受賞しているベルギー生まれの作家で、ベルギー・王立アカデミー会員でもある。1958年、フィリップ・ソレルスと運命的な出会いをし、後にその愛の経緯を書いた本をジミー (ジェイムズ・ジョイスからとったもの) との話として出版し話題になった。(Dominique Rolin, *Trente ans d'amour fou*, Éditions Gallimard, 1988 および *Journal amoureux*, Éditions Gallimard, 2000.) なおソレルスの書簡集は当初、没後出版にする意向だったが、王立アカデミーが手紙を公開したため出版を早めたという。(L'Obs, n° 2770, du 7 au 13 décembre 2017.)

ロートレアモンの発見こそが重要だったのです。アラゴンが語っているように、前線の殺戮からパリに戻って、パリが爆撃されている間中ヴァル・ド・グラース陸軍病院の病棟中に狂ったようなわめき声がひびきわたる真っ只中で、『マルドロールの歌』を互いに読み合っていたアンドレ・ブルトンとレイ・アラゴンのことを思い出すことが必要なのです。私が絶えず声を大にして強調しようとしたのはまさにこの点です。つまり、『ポエジー』の重要性が十分に認識されていない——特にこれはブランショによる解釈⁷⁾について言えることですが——という事実です。マルスラン・ブレネがこのことに触れていますが、私はこの点を強調したいのです。これはとても重要なことなのです。これを基にして文学全体について抱かれているであろうヴィジョンがひっくり返るのです。つまりロマンティシズムに対する死刑執行はイジドル・デュカスによってなされたということを理解しなくてはいけないのです。あなたがいつか誰かに、イジドル・デュカスという名前が何を意味するかと尋ねてみたら、ほとんど、というよりまったく誰からも答えが返ってこないことに大変驚かされることになるでしょう。つまり「フランスの偉大なる天才、イジドル・デュカスを知っていますか?」「ああ、ロートレアモンのことですか? 知っていますよ。ロートレアモンね!」という具合です。注意しなくてはなりません! なぜならデュカスは『ポエジー』(Ⅱ)で、「新たな学問においてはそれぞれの事柄が順番にやってくるのであり、それがこの学問の優れた点である」、「現象は過ぎ去る。私は諸法則を探す」⁸⁾と書いているからです。

アンドレ・ブルトンの最期の日々のことはとても重要です。そう、ブルトンの容体はよくなかったのです。彼はサン・シルク・ラポピーの田舎の別荘にいたのですが、救急車でパリに運ばれることになりました。この間の事情

7) Maurice Blachot, *Lautréamont et Sade*, Les Éditions de Minuit, 1949. (モーリス・ブランショ『ロートレアモンとサド』小浜俊郎訳、国文社、1983年。)

8) イジドル・デュカス『ロートレアモン全集』全一卷、石井洋二郎訳、筑摩書房、2001年、261頁、257頁。

を著書の中で語っているのは、アニー・ル・ブラン⁹⁾の夫、クロアチアの詩人ラドヴァン・イヴジッチ¹⁰⁾です。救急車は暫く走ると時々停車したので、ブルトンは救急車を降りて道路端に座り、彼に付き添ってきたイヴジッチに話しかけました。日が暮れてもう彼らはパリに着くところで、その後ブルトンはただちに入院して最期を迎えることになったのですが、その時彼が発した言葉はまさに格別なものでした。こうです。「ロートレアモンの本当の重要性はどのようなものだろう？」お望みなら私はこの言葉を使って小説をまるごと1冊書き上げてお見せしましょう。これがブルトンなのです。イジドル・デュカスの本当の重要性はどのようなものだろう？ デュカスに関しては、もはやシュルレアリスムはないのです。ロマンティシズムもなければ、シュルレアリスムもまたないのです。

——アラゴンは、『テル・ケル』グループが展開するロートレアモン論に触発されて、「ロートレアモンとわれわれ」¹¹⁾を書くわけですが……。

ソレルス：プレネが彼の本を刊行してすぐのこと、アンドレ・ブルトンの死を確認したばかりのルイ・アラゴンは、当時の『レ・レットル・フランセーズ』紙上に「ロートレアモンとわれわれ」という優れた論文を発表しました。さて、これは何を意味するのでしょうか？ つまり彼の青春が突然、すべて甦ったのです。その情熱に火をつけたのは私たち、プレネと私です。アラゴンの論文はまさに並外れたものでした。それは間違いありません、がしかし

9) アニー・ル・ブラン (1942年-) はシュルレアリスム最後の世代を担う詩人・批評家。優れたサド論や反フェミニズムに関する発言等がある。著書 *Annie Le Brun, Appelez d'air*, Plon, 1988 (『換気口』前之園望訳、シス書店、2016年) 他。

10) Radovan Ivsic, *Appelez-vous cela, rappelez-vous bien tout*, Éditions Gallimard, 2015.

11) Louis Aragon « Lautréamont et nous », *Les Lettres Françaises*, n°s 1185 et 1186, 1967. (『カイエ特集 ロートレアモン』冬樹社、1979年6月号に「ロートレアモンとわれわれ」として松浦寿輝による抜粋の邦訳が掲載されている。)

彼は『ポエジー』を理解してはいなかったのです。何故ならもし理解していたなら、スターリン独裁を正当化した事実をもつフランス共産党の重鎮として中央委員会の椅子に座り続けることはなかったでしょうから。私は考えたのですが、というより当時書きながらすでに感じていたことなのですが、イジドール・デュカス／ロートレアモンの『ポエジー』を中国の思想と結びつけて考える必要があるのではないかと。ああ、なんという知的アクロバットでしょう！ なぜならそれによって恐るべき毛沢東独裁さえも正当化するようなものですからね。ロートレアモンと矛盾しないなどと言わないで下さい。無理です。でもデュカスとなら？ おそらくあり得るでしょう。こうしたことすべてにおける革命家がデュカスなのです。

私はアラゴンのことをよく知っていました。彼は非常に魅力的な人物でした。私は、何よりも大切にしているアンドレ・ブルトンの献辞と同様に、アラゴンの『夢の波 (*Une Vague de rêves*)』¹²⁾ という作品の別刷りに添えられた献辞も大切にしています。これは『夢の波』という題名の、後に『無限の擁護 (*La Défense de l'infini*)』¹³⁾ に収録された見事なテキストの1925年の非常に珍しい別刷りですが、その献辞には「フィリップ・ソレルスへ、弟の1人より」とあり、つまり年下の者から、という意味です。確かに当時、私は彼がシュルレアリストだった頃の年齢だったのです。『夢の波』はまったく素晴らしいテキストで、大変な才能を感じさせます。私が好んで常に参照するのはまさしくこの時期のアラゴンのすべて、つまりとりわけシュルレ

12) Louis Aragon, *Une Vagues de rêves*, Éditions Seghers, 2006. 初出は1924年10月、ポール・ヴァレリー等の*Commerce*誌2号。アンドレ・ブルトンの『シュルレアリスム宣言』より僅かに早く出た、同様にシュルレアリスムの基礎となる作品。

13) Louis Aragon, *La Défense de l'infini*, Éditions Gallimard, coll. « Blanche », 1986 (fragments) et Édition de Lionel Follet, 1997. 1923年から書き始められ1926年N.R.Fから出版予告されたが、シュルレアリストの友人達による「文学的誘惑に負けた」という非難を受けて、1927年、多くの部分が本人によって燃やされた。詩と小説が一体となった、将来のアラゴンの豊穡なエクリチュールへと通じる作品。

アリズムによる冒険の時期に彼が書いたすべてです。『無限の擁護』という有名な本は、出版されるまでに長い時間がかかりました。テキストの大半、つまり多くのページは失われてしまっていたのです。というのはアラゴンがそれをナンシー・キュナード¹⁴⁾と一緒にマドリードで燃やしてしまったからです。でもキュナードはその一部を焚書から救い出していました。シュルレアリスムの冒険とは生き方の問題なのです。それは途方もない極めて強烈な生き方であったり、偏見にもとづいた生き方であったりするわけですが、その偏見は過誤と同様に興味深く、またあちこちで言われている「アカデミックではない」という言葉と同様に興味深いものです。アラゴンにもアカデミズムに転向した時期がありましたが、彼はそこから戻ってきたのです。興味深いことに、スターリンの死などがあった後われわれの世界に帰ってきてすぐ、彼は『聖週間』¹⁵⁾を出版しました。これは非の打ち所のない博学の書で、とても立派な本でした。でもまあ、1966年にはすべてをやり直さなければならなかったのです。ロートレアモンから再出発しなければならなかったのです。これはたとえば、コラージュに関してある日、次のように言ったピカソの場合に似ています。「あそこまでにしておくべきだったのだ」。つまりピカソのコラージュ時代は衝撃的でした。私は今でも家にピカソのコラージュの複製を飾っていますが、この言葉のせいで毎朝これをこの上なく戦闘的だと思って眺めています。つまりこの発言は、技法上だけでなく極めて精神的なものでもあるのです。そういうわけでわれわれは、美術史の、一般形而上学史の、そしてまさしく文学史の激動の真っ只中にいるのです。

いずれにせよ、アラゴンが私の処女作について非常に熱狂的な記事を書いてくれた人であることは忘れようがなく、それもまた、『レ・レットル・フ

14) ナンシー・キュナード (Nancy Cunard, 1896年–1965年) はイギリスの大富豪の家柄で社交界の華だった女性。マン・レイの写真に残る個性的な美貌でトリスタン・ツァラ、ジャン・コクトー、オルダス・ハックスリーを始め男女を問わず魅了したという。1926年当時、アラゴンとの濃密な時期を過ごした後、黒人問題などに没頭して波乱に富んだ一生を送った。

15) Louis Aragon, *La Semaine sainte*, Éditions Gallimard, coll. « Blanche », 1958. (ルイ・アラゴン『聖週間』小島輝正訳、平凡社、1963年。)

ランセーズ』紙上でした。ここには次のような逆説がみられます。今日ではもはやジャーナリズムはないも同然で、すべてはデジタルにネット上で起こり、紙の新聞はどんどん減ってきており、われわれは別の文明に向かっているわけですが、当時のジャーナリズムにおいてもっとも興味深い事実は、そこで絶大な自由を手にしていた1人のフランス共産党員に率いられたこの新聞が、もっとも活気に満ちた新聞だったことです。マルスラン・プレネがその後アラゴンの賛辞を受けたのも、わが国で初めてアメリカの画家たちについて語ることが出来たのも『レ・レットル・フランセーズ』紙上でした。アラゴンはこの途方もない逆説だったわけで、ご存じのようにその一生を通じてトロツキストであり続けたブルトンとの激しい確執を経験しながらも生涯共産党内の自分の椅子に座り続け、そこに留まったのです。この2人のフランス人天才に要約することの出来る20世紀の歴史について、ほんのちょっと考えてみて下さい。他の国には彼らのような存在はいないと私はただちに断言出来ます。そしてイジドル・デュカスは今日なお、すこぶる健在なのです。

——「ロートレアモン^{シアンス}の学問」では、『マルドロールの歌』を構成する主要な要素の1つである同性愛は、プラトンの、キリスト教的文明の基底にある男根中心主義的な妄想であるとされています。最近のインタビュー¹⁶⁾でも「形而上学はロートレアモンによって真正面から攻撃された。ロートレアモンはそれが同性愛の広大な歴史であることを示したのだ」と語っていますが、同時にロートレアモンの同性愛が「フランス語が含む性的な知」と深く結びついていることも強調されています。ロートレアモンにおける性愛と言語の関係について、どのようにお考えでしょうか？

ソレルス：同性愛に関しては、『マルドロールの歌』の中に想像を絶する文句があります。「〈創造主〉が闇の只中で扉を開き、ひとりの男色者を迎え入

16) Philippe Sollers, « Lautréamont au laser », *L'Infini*, n° 110, Éditions Gallimard, printemps 2010. 後に *Fugues*, Éditions Gallimard, 2012 に収録。

れた」。(5の歌、5節)¹⁷⁾ 冬の夜に、赤い角灯がそれと知らせている売春宿があります。マルドロールがやってきて銘文を読みます。「汝、この橋を渡る者よ。彼処^{かしこ}に赴くなかれ。彼処には犯罪、悪徳と同居せり。ある日、運命の門をくぐりしひとりの若者ありて、友らその帰りを待てども、むなしかりき」。(3の歌、5節)¹⁸⁾ 興味深いのは、この銘文がヘブライ語で書かれていることです。この後に、神によって肉体をずたずたにされる若者の有名なシーンが続きますが、この神は西洋の形而上学の神、マルドロールが彼が作ったと称する人間とともに根深い憎しみをもって追跡する創造主です。そして銘文をフランス語で書かれていると思われるものに取り替えるのは、彼、マルドロールです¹⁹⁾。これは重大な行為です。

シュルレアリスムの同性愛に対する突拍子もない反応を理解するには、シュルレアリスム研究所のセクシュアリティに関する審議を読み返す必要があります²⁰⁾。ブルトンがこの呼び方を全面的に拒否したことは十分に明らかです。そして同様に、私はフランス文学全体の最も重要な探求者とも言えるブルーストが、同性愛という言葉を受けようとしなかったこともつけ加えます。ブルーストは、同性愛ではなく性的倒錯者 (inverti)・性的倒錯 (inversion) の語を使う方を好みました。サドについては今は触れないで置いて後で述べることにします。というのもサドの作品は、世界中ほかのどの国の言葉もかなわないほどのフランス語で書かれているからです。同性愛の

17) 前掲、イジドル・デュカス『ロートレアモン全集』、178頁。

18) 同前、115頁。

19) 同前、124頁。新しい銘文は「かかる秘密を心中に短刀のごとく守りおくは苦痛なり。されど我は誓う、はじめてこの恐るべき城塔に入りし折に目撃せしことは、ゆめゆめ人には明かすまじと」。(3の歌、5節)

20) シュルレアリスム研究所 (Bureau de recherches surréalistes) はブルトンを中心に、アルトー、ミシェル・レリス等によって1925年創設された。セクシュアリティに関しては“Recherches sur la sexualité. Janvier 1928 - Août 1932”にまとめられている。12回にわたった審議は、グループの危機と各メンバーのこの問題に関する態度の相違を浮き彫りにした。ブルトンの他、アラゴン、アルトー、エリュアール、マックス・エルンストが全回出席している。

語はごく最近、みんなのための結婚をかちとるという奇妙な闘争に使われました。大変結構。ところで私は、数時間とか、せいぜいとても僅かな間の結婚に賛成なのです。ほとんど誰のためでもないような。これはまったく違うことです。私はセクシュアリティが、どの点において超民主的になる必要があるのか分かりません。セクシュアリティは根本的な素質を必要とするものなのですから。でもお分かりのように、私はこの点で時代の流れに逆らってものを言っているのでしょう。いや本当に、アラゴンが昔からのものであったに違いない彼の同性愛を、ほぼ公然と認めるまでにかかった時間を考えてみて下さい。とても奇妙です。というのもエルザ・トリオレやら『エルザの狂人 (Le Fou d'Elsa)』²¹⁾ やら、これらすべてがまったく真実ではなかったのですから。実に興味深いことです。アラゴンの最晩年のことですが、彼はお望みなら言葉のフランス的な意味で“en folle”と呼ぶべき姿でよく現れました。さて、なぜこうしたことすべてがフランス語では起こるのでしょうか？²²⁾ この点においては絶対に超えられないものがあり、それこそがフランス文化なのです。他に例をみない、他の国にはないものです。言語においてのみならず絵画においても。あらゆる点でどのようなものが、例えばマネのような画家に匹敵するかを理解する必要があります。また18世紀といえば、時にはほとんど知られていない作家たちがまさにきら星のようにどれだけいたか知り様もない時代ですが、その中にとりわけ巨大な火山の様な驚くべき人物がいます。すなわちサドです。私はサドにとっても早くから興味をもちました。彼について記事を書いてきましたし、本も出しました。『至高存在に抗するサド』です。『「時間」の中のサド』という副題と一緒に、フランス革命200周年の年に刊行されました²³⁾。この本には、この問題に対する多

21) Louis Aragon, *Le Fou d'Elsa*, Éditions Gallimard, coll. « Poésie », 1963. アラゴンがエルザ・トリオレに捧げた愛の詩の数々は広く知られている。

22) “folle” には「(女装した) 同性愛者」の意味があり、アラゴンの詩集のタイトル *Le Fou d'Elsa* 中の“fou”と同じ単語(女性形)である点に、ソレルスはフランス語独特のものをしている。

23) Philippe Sollers, *Sade contre l'Être suprême, précédé de Sade dans le temps*, Éditions Gallimard, 1996. (フィリップ・ソレルス『至高存在に抗するサド』)。

くの答えが含まれています。とりわけ体験の多様性とエクリチュールに関して、そしてまた女性体験に関しても。これはとても重要なことです。そしてこれもフランス語で書かれているのです。

2. ジョルジュ・バタイユと「特異性 (singularité)」

——あなたは1960年代に「屋根」²⁴⁾ 他のバタイユ論を書かれ、最近もさまざまな著作、たとえば小説『美しさ (*Beauté*)』²⁵⁾ や対談『反撃 (*Contre-attaque*)』²⁶⁾ でバタイユを頻繁に引用しておられます。私の考えるところでは、1960年代と現在のあなたのバタイユに対する見方にはそれ程大きな差異はないように思われますが、バタイユがあなたのうちで重要な位置を占めている理由は何でしょうか。またあなたは「バタイユの預言」の中で、『空の青』²⁷⁾ を同時代で最も預言的な作品であると言っておられます²⁸⁾。詩人のミシェル・ドゥギーもバタイユは預言者であると言っていますが²⁹⁾、この殺戮の時代にバタイユがわれわれになんらかの示唆を

邦訳の副題は『サド侯爵の幻の手紙』鈴木創士訳、せりか書房、1999年。)

24) Philippe Sollers, « Le toit », *Tel Quel*, n° 29, Éditions du Seuil, printemps 1967. 後に *Logiques*, *op. cit.* および *L'écriture et l'expérience des limites*, *op. cit.* に収録。

25) Philippe Sollers, *Beauté*, Gallimard, 2017.

26) Philippe Sollers, *Contre-attaque*, 2016.

27) Georges Bataille, *Le Bleu du ciel*, Éditions Gallimard, coll. « L'Imaginaire », 1991. ソレルスが挙げているこの版のほかにも Georges Bataille, *Romans et récits*, Éditions Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2004 および Georges Bataille, *Œuvres Complètes, tome III*, Éditions Gallimard, 1971 に収録されている (ジョルジュ・バタイユ『空の青み』伊東守男訳、河出書房(河出文庫)、2004年)。

28) 「『城』、『審判』、『夜の果ての旅』、『なしくずしの死』、『泥棒日記』そして『嘔吐』とくらべたとき、『空の青』は破局を前にした恐らくももっとも預言的な物語である」。Philippe Sollers, « Une Prophétie de Bataille », *La Guerre du goût*, Éditions Gallimard, coll. « folio », 2002, p. 480. 初出は「Une prophétie sexuelle », *Le Monde*, le 12 juillet 1991.

29) 「バタイユが預言的であるのは、ヒロシマのような出来事をポトラッチのように描いてみせようとするにある」。Michel Deguy « Bataille aux TM », *Les Temps Modernes*, Georges Bataille, décembre 1998 janvier-février 1999, pp. 3–15, p. 12.

与えることが出来るとお考えでしょうか？

ソレルス：ジョルジュ・バタイユは本当に、私にもっとも強い影響を与えた人物、もっとも強い印象を与えた人物です。彼は最晩年、毎日のように午後、『テル・ケル』の編集部に私に会いに来ました。『テル・ケル』10号³⁰⁾の充実したラインアップの中には、バタイユが亡くなる前にわれわれが原稿を渡された「非-知についての講演」³¹⁾と題する彼の悲歌^{エレジー}があります。バタイユはまったく特異でした。シュルレアリスムに対しても特異でしたし、彼のボルノグラフィックな作品、たとえば『マダム・エドワルダ』³²⁾のエクリチュールに関しても特異でした。私が自問して自分で答えを出した問題がありますが、こういうものです。『マダム・エドワルダ』序文のエグゼルグに、なぜヘーゲルの引用³³⁾を使ったのか？　するとここで突然、何かが方向転換するのです。そしてヘーゲル本人が『マダム・エドワルダ』を読んでいるところになるのです³⁴⁾。われわれは不可能の中にいるのですからね。『不可能な

30) *Tel Quel*, n° 10, Éditions du Seuil, été 1962.

31) « Conférences sur le Non-Savoir ». バタイユが1951年から53年にかけて4回、ジャン・ヴァールの哲学学院で行った講演の草稿を、バタイユから死の直前に手渡された『テル・ケル』編集部が『テル・ケル』10号にそのまま掲載したもの。当時はサルトル・カミュ論争の最中であり、バタイユのカミュ擁護の論旨が認められるだけでなく、バタイユがサルトルによる「新しい神秘家」のレッテルに反論を試みてもいる重要な論文である。Georges Bataille, *Œuvres Complètes, tome VIII*, Éditions Gallimard, 1976.

32) Georges Bataille, Madame Edwarda, *Romans et récits*, op. cit., p. 313. (ジョルジュ・バタイユ『マダム・エドワルダ』生田耕作訳、角川書店(角川文庫)、1992年および『マダム・エドワルダ／目玉の話』中条省平訳、光文社(古典新訳文庫)、2006年。)

33) *Ibid.*, p. 317. ヘーゲルの文章は『精神現象学』序文32節の1部。「死はこの世でもっとも恐ろしいものであり、死の業を保つことはもっとも力を要することである」。(『マダム・エドワルダ』序文のエグゼルグからの拙訳)。

34) 小説『ムーヴメント (Mouvement)』は、ヘーゲルを主人公として、マルクス、ヘルダーリン、シャトーブリアン等様々な人物が交錯する近年のソレルスのメタ・ロマンの顕著な例であるが、作中ヘーゲルが、『マダム・エドワル

もの』³⁵⁾ はもちろんバタイユの物語^{レシ}のタイトルです。これはあらゆるレベルにおいて衝撃的な作品ですが、これもまたフランス語で書かれているというわけです。

ところで『マダム・エドワルダ』は感嘆すべきテキストですが、誰もこれがヒステリーに関する素晴らしい研究書であるとはあえて言っていません³⁶⁾。『マダム・エドワルダ』をこの観点から見直したならば、バタイユは精神分析の知識がなかったのではないことが分かります。マダム・エドワルダの痙攣³⁷⁾ は、そのもっとも驚くべき例証の1つとして記録されるべきです。これはつまり、パリでシャルコが行った説明の場に居合わせた人々に関する事実について語っているのです。というのは、精神分析はパリで、サルペトリー病院でシャルコの学生だったフロイトによって発見されたのですから。ヒステリー患者たちはこの風変りな授業にとって貴重な行為をしたのであり、シャルコがそこにいた学生フロイトの耳元にこう囁いたのです。「ほらね、いずれにせよつねに性的問題なのです」。「そうですか」と言ったもののフロイトは、では彼はなぜそれを公然と言わないのだろう？と思い、こうして自分の使命を見つけることになったのです。そしてバタイユがそれを立証してみせたというわけです。これもまたパリで起こったことです。バタイユの作品には他にもプレイヤッド版に入った『わが母』³⁸⁾ や『空の青』などがありま

ダ』序文に使われている自身の文章を読むシーンが描かれている。結び近く、ヘーゲルが次作のタイトルを『ムーヴメント』と書きつけることで、ソレルス／ヘーゲルの話は完結し、メビウスの環が閉じる。(Philippe Sollers, *Mouvement*, Éditions Gallimard, 2016, pp. 70, 71 et 220.)

35) Georges Bataille, *L'Impossible, Romans et récits, op. cit.*, p. 489. (ジョルジュ・バタイユ著作集『不可能なもの』生田耕作訳、二見書房、1975年。)

36) ソレルスは以下のページでも、このテキストにおける宗教的な体験とは狂気とヒステリーによるものであることを指摘している。「D'Edwarda à Madame Edwarda, L'entretien avec Philippe Sollers », (<http://pileface.com>).

37) ソレルスは前掲 *Beauté* の中で、約半ページにわたって『マダム・エドワルダ』から、エドワルダの痙攣のシーンを引用している。(Philippe Sollers, *Beauté, op. cit.*, p. 16.)

38) Georges Bataille, *Ma mère, Romans et récits, op. cit.*, p. 757. (ジョルジュ・

すが、いずれも驚くべきものです。『空の青』は途方もない作品で、1935年にバルセロナで書かれたものの、1957年まで出版されませんでした。バタイユは『空の青』を書き、その最後に照明に浮かび上がるナチスの少年鼓笛隊を見たことを書きつけます³⁹⁾。彼はすべてを見たのです。ほとんど誰も、何も見ていなかった時代に。彼が到達した2度と定義し得ない性的明晰さの状態にあって、迫りくるものを見、それを書いたのです。つまりムッシュ・ランボーが有名な見者の手紙で言ったように、見者にならなくてはいけないのです。これはユゴー流の心霊術の交霊円卓とはまったく関係ありません。別のことです。極めて厳密な明晰さのことであって、それがロートレアモンなのです。そういうことです。こうしたことは実際、フランスで多く起こっていますが、他の国にも優れた特異性の持ち主がいます。たとえば、すべてを言い尽くしたと言ってもよいフランツ・カフカがいますし、驚くべき特異性の人物として挙げられるのは、ずばり三島由紀夫です。世界中に特異性をもった人物は大勢いますから、一通り見渡してその都度特異性のキーポイントを見つけ出す必要があります。そこで三島由紀夫なのです。私は日本人の例を挙げましたよ(笑)。

——今日は、先程あなたがバタイユやその他の作家に関して使われた「特異性(singularité)」について何う予定でおりました。あなたは『神秘の学校(L'École du Mystère)』についてのインタビューで、この小説における“singularité”の重要性を強調しておられます⁴⁰⁾。また他でもしばしばこの語に言及しておられますが、

バタイユ著作集『聖なる神』生田耕作訳、二見書房、1969年。))

39)『空の青』が1935年に執筆されているながら1957年まで刊行されなかった理由について、バタイユ自身『空の青』の前書きで、この小説の特殊性ゆえに出版されるべきではないと考えたと述べている。ソレルスは前掲 *Contre-attaque* 中で、『空の青』を「全フランス文学史上、もっとも偉大な本の1つ」と言い、ラストシーンを2ページ以上費やして引用している。そこにはバタイユが、鼓笛隊の少年達の恍惚とした表情の先に累々と築かれる屍体の山を見ていたことが書かれている。(Philippe Sollers, *Contre-attaque*, *op. cit.*, pp. 80-82.)

40)「神秘の学校は特異なものしか生まない。(中略) 私にとってこの作品の核心

この語があなたにとって正確には何を意味するかを説明して頂けるでしょうか？

ソレルス：私はますます歴史の特異性について関心を深めてきています。大いなる特異性——。バタイユの死後すぐに、私が『クリティック』誌に書いたテキストは「言語の大いなる不規則性について」⁴¹⁾ というものです。私は不規則性と特異性に興味があるのです。ご存じのとおり、この世はおしなべて戦争です。そして戦争においては、結局すべては戦術の問題です。社会の体制順応主義は、いわゆる意のままの解放を装ってますます強力に耐えがたくなってきており、それに対して自由なままでいられるなどというのは誤りです。性の自由、みんなのための結婚、一般化したフェミニズムなどの流れ、これらはみな誤りです。私は特異性をありのままにとらえるのです。私はこれまでジャン・ジュネについてたびたび書いてきましたが、たとえばそのジュネについてみますと、「ジュネの肉体」は私の百科事典の1つにあります⁴²⁾。ジャン・ジュネとは何ものだったのでしょうか？非常に重要な政治的結論、国際地政学すなわちパレスチナという結論を出したジュネは、本当になんと特異な人物でしょう⁴³⁾。そしてジョルジュ・バタイユは何ものだったのでしょうか？ ああ、誰もジョルジュ・バタイユに期待などしていなかったのです。

は、マノンというきわめて特異な人物に求められる兄妹の近親相姦にある」。« Philippe Sollers, *L'École du Mystère* », *Entretien. Bulletin Gallimard*, janvier/février 2015, <http://www.philippesollers.net/> et Philippe Sollers, *L'École du Mystère*, Éditions Gallimard, 2015.

41) Philippe Sollers, « De grandes irrégularités de langage », *Critique* n° 195–196 *Hommage à Georges Bataille*, 1963. 後に *Logiques*, *op. cit.* に収録。

42) Philippe Sollers, « Physique de Genet », *La Guerre du Goût*, *op. cit.*, p. 184. ここでソレルスが百科事典と呼んでいるのは、ソレルスが生前のロラン・バルトと約束した、一緒に『百科全書』にならった百科事典を刊行する計画を1人で実現させたもののことで、他に *Éloge de l'infini* (2001), *Discours parfait* (2010), *Fugues* (2012) (いずれも Éditions Gallimard) がある。

43) ジュネはその後半生、積極的に政治活動を行い、アメリカに渡って黒人自治運動に加わったり、中東でパレスチナ問題に尽力したりしている。

戦争におけるパルチザンは大いに私の興味をひきます。何故ならそのテクニックはゲリラ戦のテクニックだからですが、これについては T.E. ロレンスが見事な文章を書いています。ロレンスは当時のトルコ軍を相手にゲリラ戦を指揮しました。彼が書いたゲリラ戦に関するテキストを、私は『ランフィニ』誌に載せました⁴⁴⁾。ゲリラ戦は、正規軍ではなくパルチザンを基礎としています。だから効果的なのです。ゲリラ戦では正面戦争を避ける必要があります。正面部隊が前進してくるトルコ軍に対して、正面から交戦して相手に打ち破られるがままになるのではなく、散発的に絶え間なく攻撃をしかけるのです。そのためには、ごく少数で戦ってはただちに安全な後方基地に退却することが出来るパルチザンによる不規則な戦闘を進める必要があります。まさに現在のイスラム国のゲリラ戦もそうですが、領土を失っても至る所に攻撃をしかけることで、まさに驚異的な戦果をあげることが出来るのです。トルコでもどこでも、フィンランドでも世界中で！ どうすればごく僅かな手段でいかに驚くべき成果が得られるのかを理解することが重要なのです。

ところで、今いらっしゃるの『テル・ケル』誌を引き継いだ小さな季刊文芸誌のオフィスです。『テル・ケル』は今ではアーカイヴになっていますが、この雑誌は実際にあった疑う余地のない事実であり、辞書にも載っています。このような辞書、アーカイヴは常に正しいのです。私は自分の作家としての名前をラテン語の辞書からとりました⁴⁵⁾。それが今はフランス語の辞書に載っているという具合に、万事うまくいっているのです。辞書から辞書へ、どれだけのアヴァンチュールがあることでしょうか？ そしてアヴァンチュールは常に不規則で、多くの場合非合法です。私は非常に熟練した非合

44) Thomas Edward Laurence « La science de la guérilla », *L'Infini*, n° 40, Éditions Gallimard, hiver 1992.

45) ソレルスは処女作『奇妙な孤独』出版に際して、家族の反対を逸らすために本名のジョワイヨーに代えてペンネーム、ソレルスを使った。これはラテン語の“sollus（完全に）”、“ars（芸術）”に由来しており、さらに“sollers”にも「巧みな」、「最も生産に適した土地」の意味があり、デビュー当時のソレルスの意気込みを感じさせる。

法の技術を身につけており、私の小説にはすべてその刻印があります。私は特異なものにしか興味を持たないのです。私がとりわけ好きな作家がいるのですが、その作中人物たちの策略に富んだ生涯は、シェイクスピアに彼の戯曲のあらゆるテーマの着想を与えています。他ならぬプルタルコスです⁴⁶⁾。彼はまったく並外れた人物です。シェイクスピアがプルタルコスを読んだのは、アミヨが訳したフランス語版からです⁴⁷⁾、これはモンテーニュがシェイクスピアにインスピレーションを与えたのと同じです。というのはシェイクスピアのもとにジョン・フローリオによるモンテーニュの英語訳が届いているからです。ご存じのように私はボルドーの血を引いていますから⁴⁸⁾ モンテーニュのようにきわめて不規則な人物を思いつくのですが、今日ではもはや、誰もかのモンテーニュのようではありません。そうそう、モンテーニュ、そうそう、ヴォルテール、誰もがこれらの偉大な人たちに期待していた……、まったく真実ではありません。彼らは非常に粘り強いやり方でゲリラ戦を闘って自らを認めさせたのです。後になってから人々は、彼らを以前から認めていたかのようなふりをせざるを得なくなったのです。モンテーニュが、ラテン語やギリシャ語の文句が梁に書かれた図書室に閉じこもっていたなどと言わないで下さい。私は12歳の時、モンテーニュ塔に連れて行ってもらいました。私は塔を見て、これだ、と思い、靈感に捉えられました。その後、私はモンテスキューの城を見に連れて行ってもらいました。そう、何も欠けているものはありませんでした。自然は素晴らしく、ブドウは最高でした。

46) プルタルコス（プルターク）は『対比列伝』（『英雄伝』）で有名な1-2世紀帝政ローマ時代のギリシャ人著述家。ソレルスの前述 *Beauté* に、プルタルコスに触れている箇所がある。（*Beauté, op. cit.*, p. 133.）

47) シェイクスピアは、16世紀のジャック・アミヨの仏訳版を17世紀にサー・トマス・ノースが訳した英語版によってプルタルコスに触れ、多くのローマ史劇を執筆したという。

48) ソレルスはボルドーの生まれであり、イギリス的要素が顕著で、歴史的にジロンド派であったこの都市がソレルスに及ぼした影響は大きい。モンテーニュもペリゴール地方のボルドー近くの生まれであり、モンテスキューもボルドー近郊の生まれである。

誰もこうした人たちに期待してなどいなかったのです！ やり直さなくてはならないのはそのためです。なすべき仕事は、すべてを再び動かすことなのです。それがあたかもまさに起きつつあるかのように。私はそれをやっているのです。バタイユがまさに起きつつあり、ロートレアモンが起きつつあり、イジドル・デュカスが今朝、私に電話してきたという風に。ブルトンとアラゴンもどこか、そう、ヴァル・ド・グラース陸軍病院にいます。彼らは誰にも見えません。その上私たちはここ、1世紀もの歴史をもつ驚くべき場所、つまり世界でもっとも重要な出版社⁴⁹⁾にいるのです。そこで、もしあなた方が私と一緒に夜ここに残っていたら、マルセル・ブルーストやルイ＝フェルディナン・セリヌ、ジャン＝ポール・サルトル、アンドレ・ジッドなどが行き交うのを見ることになるでしょう。私は彼らに話しかけさせましたよ。この人たちは生涯、互いに関わりたとは思わなかったでしょうけれどね。それにしても何という驚くべきことでしょう！ 彼らの本はみな、ここから出版されているのですからね。これがガストン・ガリマルが——私は彼がいたところからあなた方に話しているのです——エスプリと契約を結ぶと呼んでいたことなのです。すると彼にこう言う人がいるでしょう。「そうは言っても、ブルトンとアラゴンを聖カミュと一緒に生きようには出来ないでしょう。矛盾していますよ」。「そう、まさにそれこそ私が気に入っていることなのです。矛盾していることが、です。というのも彼らは皆、とても特異ですから」。特異性の定義は宇宙に探し求めればよいのです。それはブラックホールに関係したもので⁵⁰⁾、探せば宇宙に見つかるでしょう。あるいはモニュメントでもよいではないですか。特異性とはまさに誰にも似ていない人物のことであって、周囲が彼を他の人々に似せようとすることに

49) ガリマル社は、アンドレ・ジッドとポール・クロードルの庇護の下に生まれた「N.R.F.」(*La Nouvelle Revue Française*『新フランス評論』)誌の出版部門として1911年に発足した後、ガストン・ガリマルを社主とする出版社として独立した。

50) 宇宙の特異性とは「重力の特異点」(“singularité gravitationnelle”)のこと。重力場が無限大となるような場所のことで、ブラックホールの中心に存在するとされている。

対して生涯抵抗しなくてはならない人のことです。私はこの戦争をととてもよく知っています。何故ならその研究書をゲリラ戦に関して実践しているからです。ですから私は自分が言うべきこと、書くべきことについて誰も指図出来ないほど自由でいられるのであり、それを誇りに思っています。これは非常にハイレベルなスポーツであることを請け合います。

3. ソレルスと中国

——最後の質問です。すでに「屋根」で、あなたはタオイズムを西欧の偏狭な概念と対立するものとして挙げています⁵¹⁾。あなたの中国の思想と文化に対する興味は非常に古くからのもので、かつ少しも衰えていないように思われます。あなたにとって中国は、実際に何を意味するのか教えて頂けませんか？

ソレルス：ご存じのように、私の本能は私を中国へと無意識のうちに駆り立てます。私にとっての本の中の本とも呼べるものがあります。そもそも本ではないのですが、『易経』⁵²⁾、すなわち変化・変異の書です。今話しているまさにこの時も、すべては変化・変異が進んでいる真っ最中なのです。このことは必ずしも直ちに分かるとは限りません。中国は、平らな棒と2つに割れた棒（一と--）による記号に基づく六十四卦⁵³⁾の国です。ここからすぐ

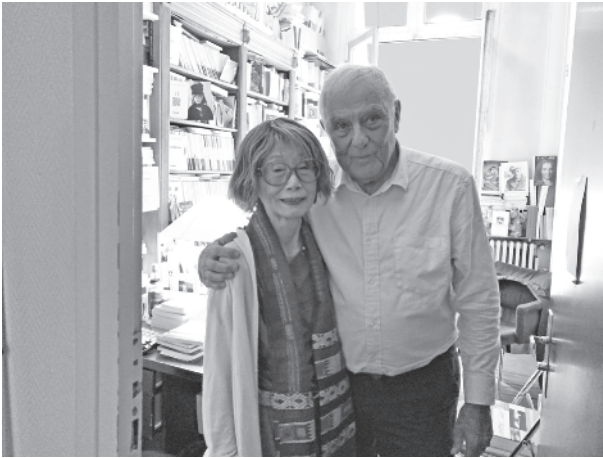
51) ソレルスはバタイユ論「屋根」の中で、「神秘主義（エックハルト）や学問（ジョルダノー・ブルーノ）、そしてとりわけ両者が共存することをつねに敵視していたキリスト教は、学問には人間主義の無分別を、宗教には卑屈な蒙昧主義を残した。」と批判したうえでこの部分に註をつけ、ジョゼフ・ニーダムの『中国の科学と文明』を引用して、中国における道教と科学の関係を例外として挙げている。Philippe Sollers « Le toit », *L'écriture et l'expérience des limites*, Éditions du Seuil, coll. « Points », 2007, p. 131.

52) 『易経』(Yi Jing または Yi King) は古代中国の占いの書であり、儒教・五經の1つ。易の語は変化を意味し、占いも変化流転していくものを捉えようとするもの。『易経』は政治の場に用いられて重大な役目を担う一方、その内容は深遠な宇宙観にまで深化している。

53) 『易経』に基づいて筮竹を用いて得られる記号・卦は、6本の爻と呼ばれる横棒（一と--）によって構成されている。3爻ずつ上下に2つ重ねたものの

に書法へといきます。真実は変化と変異から生じるのであって、ここが極めて重要な点です。そして陰陽と呼ばれるものがあるのですが、陽は陰の中にあり、陰は陽の中にあります。どこでも目にする有名な図像をご存じでしょう。女性と男性、すべては西洋のあいまいなものの反対です。対立はなく、変化する相互浸透があるのです。西洋人にとっては、その形而上学、宗教その他から、2は1に融合すべきものとされていますが、他ならぬ毛沢東が言ったように、1は2に分かれるのです。これに基づいて、あなたが自分と異なる性の人と一緒にいるとき、例えばそこにいるのが1人の男性と1人の女性だとすると、あなた方は2人ではなく4人なのです。あなたが自分が男であると思うのであるとするとあなたは女でもあるのであり、あなたは彼女と合わせて4人になるのです。なぜか、ですか？私の男性は決して彼女の男性にはならないし、彼女の女性は決して私の女性にはならないからです。これまで散々悩まされてきた性差から出発する必要があるのです。1つの調和が2つに分割されたものだったことを理解するのに、プラトン主義者である必要があるでしょうか？ 全くありません。ここからさまざまなセクシュアリティが考え出されていくわけで、つまりホモセクシュアリティ、LGBT、そして今やそれに新規参入者がいます。^{ニュートラル}中性です。LGBTNです！これらすべてとうまくやっていてください。コミュニティになっているようです。私にはまったく信じられません。私は各人、各個人は男であろうと女であろうと、絶え間ない変化の状態にいます。パートナーを見つけることはそう簡単ではありません。というのは一貫して変化の状態にいることを拒否する人と出会ってしまうこともありますから。私が首尾一貫して革命家である理由は、一貫して変化の状態にいます！

組み合わせによって8つの基本図像「八卦」が作られ、更にそれを重ねて「六十四卦」とされた。



ガリマール本社のソレルス氏のオフィスで、フィリップ・ソレルス氏と筆者
撮影：築山和也氏

付記：本稿訳出に際しては、音源から原稿に起こすに当たって文学部・築山和也氏のご尽力を得たことを謝意とともに申し述べます。